

改訂版聴くスキル尺度の大学生への適用の検討

著者	藤原 健志, 三宅 拓人, 濱口 佳和
著者別名	Fujiwara Takeshi, Miyake Takuto, Hanaguchi Yoshikazu
雑誌名	筑波大学心理学研究
号	47
ページ	65-75
発行年	2014-02-25
その他のタイトル	An examination of the application of revised versions of listening skills scales for Undergraduates
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123438

改訂版聴くスキル尺度の大学生への適用の検討¹⁾

筑波大学人間系 藤原 健志

筑波大学大学院人間総合科学研究科 三宅 拓人

筑波大学人間系 濱口 佳和

An examination of the application of revised versions of listening skills scales for undergraduates

Takeshi Fujiwara (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Takuto Miyake (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Many researches and practices indicate that it is essential for children and adolescents to acquire and practice listening skills. The purposes of this study are to examine whether revised version of listening skills scales for high school students (Fujiwara & Hamaguchi, 2013) are applicable to undergraduates, and to confirm their reliability and validity. Three hundred and fifteen undergraduates completed a questionnaire. Factor analyses revealed that there are three factors for the cognitive aspect and five for the behavioral aspects of the listening skills scales, which are the same as those identified for the scales for high-school students. All the subscales have sufficient levels of internal consistency. The constructed listening skills scales have positive correlation with self-reported scores for social skills, empathy and self-regulation. Sex differences on the scales are discussed from the perspective of interpersonal development.

Key words: listening skills, scale development, reliability, validity, social skills

問題と目的

近年、青年をめぐるとコミュニケーション・スキルについて、その重要性が各種統計資料等によって示されている。事務職や営業職において、高校卒業予定者ならびに大学卒業予定者の双方とも、“コミュニケーション能力”が採用時に最も重視される能力

であること、この能力は比較的短期間の訓練により向上可能な能力であるとする調査結果が得られている（厚生労働省、2004；日本経済団体連合会、2010）。また、ニートを対象とした調査報告では、彼らが対面コミュニケーションに対して強い苦手意識を抱いており、そうした苦手意識が不登校、いじめ、引きこもり、職場の人間関係のトラブルといったネガティブな体験につながり、苦手意識がさらに増幅されて就労が困難な状況に追い込まれたケースが多いと報告されている（厚生労働省、2007）。こうした状況を受け、文部科学省（2008）は、日本の大学が授与する学士が保証する能力の内容に関して、参考指針を示している。その中でも、コミュニ

1) 本研究のデータ収集にあたっては、2011年度筑波大学開設授業「心理学研究法Ⅱ」の一環で、人間学群心理学類（当時）の岡田美鳥さん・清水菜央さん・中村聖さんにご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

ケーション・スキルは知的活動、職業活動ならびに社会生活のいずれにおいても必要とされる汎用的技能の一つとして挙げられている。以上より、コミュニケーション能力を獲得し、高めることに対する社会的ニーズと、社会適応に困難を抱えた児童青年の現状から、コミュニケーション能力向上に対する教育の機運が高まっているといえる。

こうした背景を受け、コミュニケーション能力の向上を目的として、大学生を対象とした“社会的スキル・トレーニング (social skills training; SST)”の実践が散見されるようになった(相川, 1999; 堀・吉武・池田・佐藤, 2011; 栗林・中野, 2007; 太幡, 2012)。これら介入により、孤独感の低減(相川, 1999)、察知能力や自己抑制の向上(栗林・中野, 2007)、リーダーシップの向上(太幡, 2012)、家族へのサポート提供の増加(堀他, 2011)といった成果が示されている。これら SST にはいずれも、標的スキルとして“共感を示す”や“傾聴する”など、相手の“話を聴く”という内容が含まれている。“聴くスキル”(listening skills)は社会的スキルの中でも“基本中の基本”(相川, 2000)とされており、その重要性から、聴くスキルや聴くこと(listening)に関する尺度作成が試みられ、同時にその信頼性や妥当性についても検討が進められている(Table 1)。また、これら尺度と様々な変数との関連が検討されている。タイプ A (Sargent, Fitch-Hauser, & Weaver, 1997) や攻撃性 (Weaver & Weaver, 2008) などのパーソナリティ変数や、学校生活満足度(藤原・濱口, 2011b, 2012; 金山・中台・前田, 2004) などの適応感、さらにはスキルを規定する対人動機(藤原・濱口, 2011b, 2012) などと聴くスキルとの関連が明らかとなっている。

ただし、聴くことや聴くスキルを測定する尺度に関しては、その信頼性と妥当性、構成概念に関して、課題が残るものが多い。大学生を対象とした諸尺度(Table 1)のうち、LSP-16 (Watson, Baker, & Weaver, 1995) や聴く態度尺度(田邊・小川, 2008)、聴く認知スキル尺度(藤原・濱口, 2011a)の下位尺度においては、一部信頼性係数が低いものが存在する。また、“自然体”や“無関心”(久木山, 2006)といった、聴くことを“スキル”として捉えるには困難な構成要素が含まれている点や(藤原・濱口, 2013)、因子構造の安定性についても(田邊・小川, 2008)、従来より問題点として指摘されている。社会的スキルは認知的側面と行動的側面の両方を含んでおり(相川, 1996)、聴くことは内的な情報処理過程としての認知面と身体の運動にかかわる行動面の両面から多次元的にとらえる必要があると

されているが(Rhodes, Watson, & Baker, 1990)、認知と行動の両側面に焦点を当て、明確に区別した上で、聴くことについての理論モデルに立脚した尺度の不在が指摘されていた(藤原・濱口, 2013)。

こうした課題を踏まえ、藤原・濱口(2011a)は、Brownell (1985, 2009) の HURIER モデルを基に、聴くスキルを認知と行動の両側面から測定する、大学生を対象とした二つの尺度を開発した。このうち、聴く認知スキル尺度は6因子20項目(“共感”、“記憶の保持”、“理解”、“会話への集中”、“客観性の維持”、そして“他者視点の考慮”)、聴く行動スキル尺度は6因子20項目(“相手への応答”、“定位”、“話を遮らない”、“手をとめて聴く”、“前傾”、そして“寄りかからない”)から、それぞれ構成されている。信頼性・妥当性の検討も行われているが、 α 係数の低さや下位尺度の項目数の少なさなど、一部下位尺度の内的一貫性や網羅性にやや問題が残った(藤原・濱口, 2011a)。この問題は高校生版にも残され、当初想定された構成要素すべてを尺度化するに至らなかった(藤原・濱口, 2011b)。これを受け、藤原・濱口(2013)は、高校生を対象に、聴くスキル尺度(藤原・濱口, 2011b)の改訂を行っている。改訂版聴くスキル尺度は、聴く認知スキル尺度3因子20項目(“会話内容の理解”、“話し手に対する共感”、“評価・判断の保留”)、聴く行動スキル5因子25項目(“会話への言語的応答”、“うなずき・あいづち”、“前傾姿勢”、“アイコンタクト”、“遮らずに聴く”)から構成されている。いずれの下位尺度もおおむね十分な内的一貫性を有し、近接概念である全般的社会的スキルや社会的自己制御、共感性と正の関連を有することが確認されている(藤原・濱口, 2013)。高校生版尺度の改訂は、高校生版と同様の課題を抱えている大学生版における改訂の必要性を示すものであると同時に、大学生版の改訂に際して重要な資料となり得る。既存の聴くスキル尺度の問題点を修正し、その信頼性と妥当性を示すことは、大学生の聴くスキルをめぐる基礎研究の発展と、その知見を受けて展開される介入研究において重要な役割を果たすであろう。

以上より、本研究の目的は、高校生用聴くスキル尺度改訂版(藤原・濱口, 2013)の大学生に対する適用の可否を明らかにした上で、その信頼性と妥当性を検討することである。具体的には、高校生用聴くスキル尺度改訂版(藤原・濱口, 2013)の項目群を大学生へ適用し、因子分析を通じた尺度構成を行う。信頼性と妥当性に関しては、藤原・濱口(2011a, 2013)同様、Cronbachの α を算出して内的一貫性を確認するとともに、共感性、社会的自己

Table 1
聴くことや聴くスキルを測定する尺度のレビュー

尺度名	文献情報	因子数	件法	因子名 (項目数)	信頼性検討の有無とその方法	妥当性検討の有無とその方法
中学生						
積極的な聴き方スキル尺度	金山・中台・前田 (2004)	1	5 (8)		$\alpha = .86$	なし
聴く認知スキル尺度	藤原・濱口 (2012)	3	5	会話への集中 (2) 共感 (3) 記憶の保持 (5)	下位尺度: $\alpha = .72$ から 尺度全体: $\alpha = .74$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
聴く行動スキル尺度	藤原・濱口 (2012)	5	4	会話への応答 (6) 寄りかからない (2) 手をとめて聴く (2)	下位尺度: $\alpha = .83$ から 尺度全体: $\alpha = .83$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
高校生						
聴く認知スキル尺度	藤原・濱口 (2011b)	4	5	会話への集中 (5) 共感 (4)	下位尺度: $\alpha = .75$ から 尺度全体: $\alpha = .83$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
聴く行動スキル尺度	藤原・濱口 (2011b)	5	4	相手への応答 (7) 手をとめて聴く (3) 話を連れない (4)	下位尺度: $\alpha = .84$ から 尺度全体: $\alpha = .77$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
改訂版聴く認知スキル尺度	藤原・濱口 (2013)	3	5	会話内容の理解 (9) 話し手に対する共感 (7)	下位尺度: $\alpha = .90$ から 尺度全体: $\alpha = .94$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
改訂版聴く行動スキル尺度	藤原・濱口 (2013)	5	5	会話への言語的応答 (7) うなずき, あいつち (5) 前傾姿勢 (4)	下位尺度: $\alpha = .90$ から 尺度全体: $\alpha = .91$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
大学生						
Litening styles profile (LSP-16)	Watson, Baker, & Weaver (1995)	4	4	人志向的 (4) 活動志向的 (4)	下位尺度: $\alpha = .65$ から 研究1の下位尺度: $\alpha = .89$ から 研究2の下位尺度: $\alpha = .85$ から	なし
聴く態度尺度	田邊・小川 (2008)	5	5	研究1 親身な態度 (11) 拒否的・無関心な態度 (16) 消極的態度 (13) アドハイス (3) 配慮 (3)	研究1の下位尺度: $\alpha = .89$ から 研究2の下位尺度: $\alpha = .85$ から	セルフモニタリング, 社会的スキルとの関連
聴くスキル尺度	久木山 (2006)	8	5	勇気作り (9) 共感 (8) アドハイス (6) 表情読解 (5)	下位尺度: $\alpha = .91$ から	社会的スキルと正の関連
聴く認知スキル尺度	藤原・濱口 (2011a)	6	5	自然体 (3) 会話への集中 (4) 客観性の維持 (3) 他者視点の考慮 (2) 手をとめて聴く (3) 前傾 (2) 寄りかからない (2)	下位尺度: $\alpha = .78$ から 尺度全体: $\alpha = .85$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
聴く行動スキル尺度	藤原・濱口 (2011a)	6	4	理解 (2) 相手への応答 (6) 定位 (3) 話を連れない (4)	下位尺度: $\alpha = .87$ から 尺度全体: $\alpha = .79$	共感性, 社会的スキル, 社会的自己制御 (一部) と正の関連
成人						
Active Listening Attitude Scale (ALAS)	Mishima, Kubota, & Nagata (2000)	3	4	会話機会 (7) 聴く態度 (13) 聴くスキル (11)	下位尺度: $\alpha = .84$ から 2週間の再検査信頼性: $r = .83$ から	一般サンプルならびに医師・心理士サンプルとの比較により後者の尺度得点が高いことを示した。 原版尺度との相関: $r = .99$ から
Short version of ALAS	Kubota, Mishima, & Nagata (2004)	2	4	聴く態度 (10)	下位尺度: $\alpha = .79$ から	原版尺度との相関: $r = .99$ から

制御、社会的スキルとの相関係数を算出し、その併存的妥当性を検証する。

方 法

調査対象者

関東地方の国立大学および私立大学計3校に通う大学1年生から4年生315名(男子109名、女子206名)であった(年齢の平均は19.30歳、SDは1.51であった)。

調査時期

2011年9月から10月であった。

調査方法

以下の内容から構成された質問紙を、大学の講義時間の一部を利用して配布・教示し、回答を求めた。

質問紙構成と内容

A4判用紙5枚で構成された。フェイスシートには、“人の話を聞くこと”についての研究であることを示し、調査は授業の成績とは無関係であることを、倫理的配慮(回答の中止や拒否の権利について)を記載し、学年、年齢、性別の回答欄を設けた。2ページ以降は、以下の尺度をその順番で用いた。

聴く認知スキル尺度 藤原・濱口(2013)の高校生用聴くスキル尺度改訂版のうち、聴く認知スキル尺度を用いた。“あなたが友達の話を知っているときに感じることや考えることについて、次の質問に答えてください”と教示した上で、20項目について、“全く当てはまらない(1点)”, “当てはまらない(2点)”, “どちらともいえない(3点)”, “当てはまる(4点)”, “よく当てはまる(5点)”の5件法で回答を求めた。

聴く行動スキル尺度 藤原・濱口(2013)の高校生用聴くスキル尺度改訂版のうち、聴く行動スキル尺度を用いた。“あなたが友達の話を知っているときに、実際にやっていることについて、次の質問に答えてください”と教示した上で、25項目について、聴く認知スキル尺度同様5件法で回答を求めた。

共感性尺度 登張(2003)の共感性尺度を用いた。本研究では、藤原・濱口(2013)同様、4下位尺度のうち、“共感的関心”と“気持ちの想像”の二つの下位因子から、因子負荷量の高い順に5項目ずつ、計10項目(5件法)を用いた。

社会的自己制御尺度 原田・吉澤・吉田(2008)の社会的自己制御尺度を用いた。本研究では、藤

原・濱口(2013)同様、3下位尺度のうち、“持続的対処・根気”と“感情・欲求制御”の2下位因子から、因子負荷量の高い順に5項目ずつ、計10項目(5件法)を用いた。

社会的スキル尺度 菊池(1988)の社会的スキル尺度(KiSS-18; 18項目5件法)を用いた。

結 果

聴く認知スキル尺度の因子分析

聴く認知スキル尺度20項目について、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値の減衰率と解釈可能性から3因子解を採用し、因子負荷量はその因子に対して.40未満であった項目を削除した。第3因子までの累積寄与率は50.47%であった(Table 2)。第1因子は、“友達の話が長くなっても、話の細かい内容まで割とよく覚えている”や“友達がたくさん話をしていても、その内容を忘れてしまうことは少ない”など、高校生用聴くスキル尺度改訂版(藤原・濱口, 2013)の“会話内容の理解”因子に含まれる項目群を中心に構成されたため、高校生版同様“会話内容の理解”と命名された。第2因子は、“友達の話を知っていて、‘友達は自分と考え方が違うのかもしれない’”と感じても、すぐにそうとは決めつけない”や“友達の話を知っていて、友達と考え方や意見が違うと感じても、すぐにそうとは結論づけない”など、高校生版の“評価・判断の保留”因子に含まれる4項目から構成されたため、高校生版同様“評価・判断の保留”と命名された。第3因子は、“話をしていて友達の表情を見れば、友達がどんな気持ちなのか分かる”や“友達の声の調子から、友達の気持ちが分かる”など、高校生版尺度の“話し手に対する共感”因子に含まれる項目群を中心に構成されたため、“話し手に対する共感”と命名された。

聴く行動スキル尺度の因子分析

聴く行動スキル尺度25項目について、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値の減衰率と解釈可能性から5因子解を採用した。第5因子までの累積寄与率は、59.43%であった(Table 3)。因子分析の結果、高校生用聴くスキル尺度改訂版と同一の因子構造が得られた。第1因子は、“話を知っていて、わからなかったところは友達に質問する”や“話を知っているだけではなく、時には思ったことや感じたことを友達に伝える”などの7項目から構成され、“会話への言語的応答”と命名された。第2因子は、“友達の話を知るとき

には、話している相手のほうを向く”や“友達が話しかけてきたときには、相手の顔を見ながら話を聞く”などの4項目から構成され、“アイコンタクト”と命名された。第3因子は、“友達の話を聞いている時は、からだの前めりになる”や“友達の話を

聞いているときは、相手のほうに身を乗り出す”などの4項目から構成され、“前傾姿勢”と命名された。第4因子は、“友達の話を聞きながら、‘うんうん’、‘へえー’などのあいづちを打つ”や“友達の話を聞きながら、‘そうなんだ’、‘本当に!?’など

Table 2
改訂版聴く認知スキルの因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	因子負荷量			平均値	(SD)	h ²
	F1	F2	F3			
F1: 会話内容の理解 α = .87						
18 友達の話が長くなって、話の細かい内容まで割とよく覚えている	.81	-.01	-.14	3.12	(1.03)	.56
8 友達がたくさん話をしている、その内容を忘れてしまうことは少ない	.81	-.05	-.11	3.26	(1.02)	.56
3 友達が一方的に話を続けていても、話の内容をよく覚えている	.77	.12	-.16	3.57	(0.98)	.57
7 友達の話が長くても、話の要点をきちんと把握できる	.69	-.05	.18	3.43	(0.92)	.59
22 友達の話が複雑でも、話の内容を把握できる	.61	.05	.06	3.41	(0.91)	.44
2 友達の話がこみ入っていても、話のテーマやポイントをつかむことができる	.59	-.05	.17	3.50	(0.88)	.44
23 友達の話を聞いていて気になったことは、忘れず覚えている	.48	-.03	.19	3.72	(0.98)	.34
21 友達の話が長くても、飽きずに聞いていられる	.45	.29	-.02	3.30	(1.04)	.39
12 友達の話のテーマが次から次へ変わっても、その内容を理解できる	.40	-.04	.29	3.42	(0.88)	.34
F2: 評価・判断の保留 α = .84						
10 友達の話を聞いていて、「友達は自分と考え方が違うのかもしれない」と感じて、すぐにそうとは決めつけない	-.03	.82	.10	3.55	(0.95)	.72
5 友達の話を聞いていて、友達と考え方や意見が違うと感じても、すぐにそうとは結論づけけない	.03	.78	-.06	3.57	(0.96)	.59
15 友達が自分と同じ考えなのか違う考えなのか、すぐには決めつけない	.01	.74	-.01	3.43	(0.95)	.55
25 自分と友達のどちらの意見が正しいのか、すぐには判断しない	.04	.61	.04	3.67	(0.93)	.42
F3: 話し手に対する共感 α = .79						
19 話をしている友達の表情を見れば、友達がどんな気持ちなのか分かる	.03	-.04	.82	3.67	(0.93)	.67
4 友達の声の調子から、友達の気持ちがわかる	-.10	.05	.77	3.84	(0.90)	.47
9 友達がはっきり言わないことでも、友達の雰囲気や、どんなことを伝えたいのか、だいたい分かる	.17	-.08	.62	3.73	(0.88)	.55
14 友達の立場に立って、友達がどんな気持ちなのかを考える	-.12	.26	.52	3.73	(0.90)	.38
採用されなかった項目						
1 周囲が少しくらい騒がしくても、友達の話に集中できる				3.77	(0.98)	
16 興味のある話題でも、友達の話を長く聞いていることができない (R)				3.92	(1.07)	
17 会話の中で友達が最も話したいことを理解するのは、難しいことではない				3.55	(0.90)	
因子間相関						
		F2	F3			
	F1	.42	.48			
	F2		.43			

(R)：逆転項目

Table 3
改訂版聴く行動スキルの因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	因子負荷量					平均値 (SD) h^2	
	F1	F2	F3	F4	F5		
F1: 会話への言語的応答 $\alpha = .88$							
28 話を聞いていて、わからなかったところは友達に質問する	.86	-.05	-.05	.02	.03	3.77	(0.92) .70
26 話を聞いているだけではなく、時には思ったことや感じたことを友達に伝える	.85	.05	-.05	-.06	-.11	3.77	(0.90) .70
10 ただ聞いているだけではなく、時と場合に応じて感想や意見を友達に言う	.68	.20	-.10	.04	-.12	3.89	(0.92) .66
20 話が長くなると、「それってこういうこと?」と相手に確認する	.66	-.24	.15	.02	.04	3.55	(1.07) .38
18 友達が一通り話し終えたら、自分の思ったことや感じたことを友達に伝える	.66	.03	.02	.01	.01	3.74	(0.92) .48
12 友達の話で、もっと知りたいと感じたことは質問する	.66	.08	-.13	.18	-.05	3.88	(0.89) .65
4 話がまとまらなくなったときには、話の内容をまとめて、相手に確認する	.55	-.18	.09	.07	.11	3.37	(1.04) .29
F2: アイコンタクト $\alpha = .90$							
23 友達の話を聞くとときには、話している相手のほうを向く	-.16	.87	.00	.13	.01	3.79	(0.93) .77
7 友達が話しかけてきたときには、相手の顔を見ながら話を聞く	-.05	.83	.02	.04	-.08	3.74	(0.96) .68
15 友達の話を聞くとときには、相手のほうを向く	-.10	.82	.00	.13	.04	3.80	(1.02) .75
31 友達の話を聞くとときには、友達の目を見るようにしている	.12	.75	.07	-.08	.02	3.73	(1.04) .66
F3: 前傾姿勢 $\alpha = .89$							
16 友達の話を聞いているときは、からだの前めりになる	.02	-.04	.90	-.04	.00	2.94	(1.05) .78
24 友達の話を聞いているときは、相手のほうに身を乗り出す	-.09	.03	.89	.04	-.09	3.03	(1.07) .80
32 友達の話を聞いているときは、相手の方へからだを少し傾ける	.00	.09	.80	.04	-.01	3.21	(1.02) .73
8 友達の話を聞いているときは、相手にからだを少し近づける	.08	.02	.65	.03	.01	3.19	(0.97) .48
F4: うなずき・あいづち $\alpha = .90$							
17 友達の話を聞きながら、「うんうん」、「へえー」などのあいづちを打つ	.09	.13	-.08	.78	.03	4.22	(0.92) .83
1 友達の話を聞きながら、「そうなんだ」、「本当に!？」などの短い言葉をかける	.04	.03	-.01	.76	.00	4.17	(0.90) .65
9 友達の話を聞いているとき、うなづくことが多い	.07	.05	.04	.73	.02	4.06	(0.90) .68
25 友達の話に合わせて、うなずいたり首をかしげたりする	.22	-.03	.09	.66	-.02	4.05	(0.96) .68
21 友達の話を聞いていて、相手が笑うと自分も自然と笑顔になる	.21	.05	.12	.44	.10	4.14	(0.91) .49
F5: 遮らずに聴く $\alpha = .72$							
27 友達が話していても、友達の話をさえぎって話し始めることがある (R)	-.01	-.04	-.02	.05	.76	3.39	(1.10) .58
11 友達が話している最中によく口をはさむ (R)	-.18	-.05	-.11	.15	.64	3.07	(1.09) .50
13 真剣な話を聞いていたのにふざけて笑ってしまうことがある (R)	.00	-.07	-.04	.06	.55	3.52	(1.17) .31
6 何か別のことをしながら友達の話を聞くことが多い (R)	.28	.24	.11	-.21	.50	3.41	(1.02) .39
22 友達が話しかけてきても、自分がそれまでやってきたことを続ける (R)	.06	.31	.01	-.17	.42	3.23	(0.96) .27
因子間相関							
	F1	F2	F3	F4	F5		
F1		.56	.30	.64	-.05		
F2			.43	.64	.24		
F3				.27	-.06		
F4					.23		

(R) : 逆転項目

の短い言葉をかける”などの5項目から構成され、“うなずき・あいづち”と命名された。第5因子は、“友達が話していても、友達の話さえぎって話し始めることがある（逆転項目）”や“友達が話している最中によく口をはさむ（逆転項目）”などの5項目から構成され、“遮らずに聴く”と命名された。

聴くスキル尺度の信頼性・妥当性の検討

聴く認知スキル尺度 聴く認知スキル尺度について、尺度の内的一貫性を検討するため、尺度全体と各下位尺度について α 係数を算出した。その結果、尺度全体の α 係数は.94、各下位尺度の α 係数は.87から.79であった（下位尺度の α 係数はTable 2に記載）。また、尺度の併存的妥当性を検討するため、聴く認知スキル尺度と共感性、社会的自己制御、全般的社会的スキルとの相関係数を算出した（Table 4）。その結果、社会的スキルとはおおむね.40前後の有意な正の相関が認められた。同様に、共感性下位尺度ならびに社会的自己制御下位尺度においては、聴くスキル各下位尺度とおおむね.30から.20前後の有意な正の相関係数が得られた。

聴く行動スキル尺度 聴く行動スキル尺度について、尺度の内的一貫性を検討するため、尺度全体と各下位尺度について α 係数を算出した。その結果、尺度全体の α 係数は.91、各下位尺度の α 係数は.90から.72であった（下位尺度の α 係数はTable 3に記載）。また、尺度の併存的妥当性を検討するため、聴く行動スキル尺度と共感性、社会的自己制御、全般的社会的スキルとの相関係数を算出した（Table 4）。その結果、社会的スキルとはおおむね.30前後

の有意な正の相関が認められた。同様に、共感性下位尺度ならびに社会的自己制御尺度の“持続的対処と根気”においては、聴くスキル各下位尺度とおおむね.30から.20前後の有意な正の相関係数が得られた。また、社会的自己制御尺度の“感情と欲求制御”においては、聴くスキル各下位尺度と.20前後の弱い正の関連が認められた。

聴くスキル尺度の性差の検討

聴くスキル尺度の性差を検討するために、聴く認知スキル尺度と聴く行動スキル尺度について、尺度全体ならびに各下位尺度の記述統計量を算出するとともに、男女差の t 検定を行った（Table 5）。その結果、聴く認知スキル尺度では、話し手に対する共感（ $t(191.47) = 3.27, p < .01$ ）において女子の得点が男子の得点よりも有意に高かった。聴く行動スキル尺度においては、尺度全体（ $t(313) = 4.55, p < .01$ ）、会話への言語的応答（ $t(195.97) = 2.92, p < .01$ ）、うなずき・あいづち（ $t(313) = 4.33, p < .01$ ）、前傾姿勢（ $t(313) = 2.38, p < .05$ ）、アイコンタクト（ $t(185.32) = 3.31, p < .01$ ）、ならびに遮らずに聴く（ $t(313) = 2.31, p < .05$ ）において有意な性差が確認され、いずれも女子の得点が男子の得点よりも高かった。

聴くスキル下位尺度間の関連の検討

聴くスキル各下位尺度間の関連を検討するため、聴く認知スキルならびに聴く行動スキル各下位尺度間の相関係数を算出した（Table 6）。その結果、聴く認知スキル尺度全体と聴く行動スキル尺度全体の

Table 4
改訂版聴くスキル尺度と他尺度との相関係数

	共感性尺度		社会的自己制御尺度		KiSS-18
	共感的 関心	気持ちの 想像	持続的 対処と根気	感情と 欲求制御	
認知スキル尺度	.24 **	.37 **	.33 **	.26 **	.49 **
会話内容の理解	.08	.20 **	.22 **	.16 **	.39 **
話し手に対する共感	.28 **	.38 **	.35 **	.19 **	.47 **
評価・判断の保留	.22 **	.34 **	.20 **	.28 **	.31 **
行動スキル尺度	.36 **	.37 **	.30 **	.18 **	.40 **
会話への言語的応答	.33 **	.34 **	.23 **	.07	.40 **
うなずき・あいづち	.29 **	.28 **	.24 **	.13 *	.33 **
前傾姿勢	.26 **	.19 **	.06	-.06	.19 **
アイコンタクト	.22 **	.27 **	.19 **	.13 *	.28 **
遮らずに聴く	.11	.18 **	.27 **	.30 **	.11

** $p < .01$ * $p < .05$.

相関係数は.63 ($p < .01$)であった。また下位尺度においては、弱から中程度の正の有意な相関係数が認められた。特に認知スキル尺度の“話し手に対する共感”は、行動スキル尺度の“会話への言語的応答” ($r = .54, p < .01$)、 “うなずき・あいづち” ($r = .61, p < .01$)、 “アイコンタクト” ($r = .50, p < .01$)と.50以上の相関係数を有していた。

考 察

本研究の目的は、高校生用聴くスキル尺度改訂版(藤原・濱口, 2013)の大学生に対する適用の可否を明らかにした上で、その信頼性と妥当性を検討することであった。

改訂版聴くスキル尺度の構成

聴く認知スキル尺度においては、探索的因子分析の結果、大学生においても、高校生版尺度(藤原・濱口, 2013)と同等の因子構造を有することが明らかとなった。因子分析に使用した20項目のうち、一部項目は因子分析の過程で尺度として採用されなかった。これにより、“会話内容の理解”ならびに“話し手に対する共感”の2因子においては、大学生版と高校生版の間に項目の相違が生じることとなった。今後、高校生・大学生の間で聴く認知スキル得点を比較する際には、何らかの工夫を行うことが必要となろう。また改訂前の大学生版尺度(藤原・濱口, 2011a)は6因子構造であったが、今回の改訂では3因子に集約された。このうち、改訂前

Table 5
改訂版聴くスキル尺度の記述統計量ならびに男女差の t 検定結果

	男子		女子		男女差の t 検定	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	df	t 値
聴く認知スキル尺度全体	3.43	(0.53)	3.54	(0.50)	313	1.92 †
会話内容の理解	3.38	(0.65)	3.43	(0.69)	313	0.65
話し手に対する共感	3.56	(0.77)	3.84	(0.65)	191.47	3.27 **
評価・判断の保留	3.47	(0.87)	3.60	(0.72)	188.29	1.32
聴く行動スキル尺度全体	3.40	(0.51)	3.66	(0.49)	313	4.55 **
会話への言語的応答	3.54	(0.78)	3.80	(0.68)	195.97	2.92 **
うなずき・あいづち	3.88	(0.87)	4.26	(0.68)	313	4.33 **
前傾姿勢	2.93	(0.87)	3.18	(0.90)	313	2.38 *
アイコンタクト	3.53	(0.97)	3.89	(0.79)	185.32	3.31 **
遮らずに聴く	3.19	(0.74)	3.39	(0.73)	313	2.31 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

Table 6
改訂版聴くスキル下位尺度間の相関係数

	聴く認知スキル尺度				聴く行動スキル尺度					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 認知スキル尺度		.88 **	.69 **	.68 **	.63 **	.49 **	.53 **	.21 **	.45 **	.38 **
2 会話内容の理解			.46 **	.42 **	.46 **	.36 **	.35 **	.18 **	.33 **	.26 **
3 話し手に対する共感				.41 **	.62 **	.54 **	.61 **	.25 **	.50 **	.32 **
4 評価・判断の保留					.43 **	.33 **	.41 **	.11 *	.37 **	.31 **
5 行動スキル尺度						.75 **	.84 **	.54 **	.80 **	.44 **
6 会話への言語的応答							.66 **	.28 **	.47 **	.01
7 うなずき・あいづち								.33 **	.65 **	.25 **
8 前傾姿勢									.43 **	-.03
9 アイコンタクト										.28 **
10 遮らずに聴く										

** $p < .01$ * $p < .05$.

の“会話への集中”と“他者視点の考慮”，そして“共感”が“話し手に対する共感”に，“記憶の保持”と“理解”が“会話内容の理解”に，そして“客観性の維持”が“評価・判断の保留”に，それぞれ対応している。このうち，前二者は相手とかかわりを持ち（attending），内容を理解する（comprehend）点において，各因子に集約したと考えられ，高校生用改訂版（藤原・濱口，2013）の因子構造と一致する。“客観性の維持”については，HURIERモデル（Brownell, 1985, 2009）の“評価”（evaluating）に対応している。改訂前の下位尺度同士が集約される形でより少ない因子数に収束したことを考慮すると，今回の改訂は，聴くスキルの認知面を少数の因子でよりよく説明し，各因子間の関連をより簡潔に論じることに寄与すると考えられる。

今回作成された大学生用改訂版聴く認知スキル尺度と高校生用同尺度（藤原・濱口，2013）を比較すると，因子間相関において，高校生においては.60から.70程度のやや高めの因子間相関が見出されていたのに対し，大学生を対象とした本研究の結果においては，いずれも.45程度と，相対的に低い値が示された。高校生に比べると，大学生は各因子が相互に関連しつつも，一定の独立性を有すると認知しているのかもしれない。従来，社会的スキル研究において，スキルは状況によって規定され，個人の置かれた状況に応じた行動であるとする考え方も存在する（Hargie, 1997; Van Hasselt, Hersen, Whitehill, & Bellack, 1979）。因子間相関の低下は，高校生から大学生にかけて，理解や共感，対立回避を含む聴くスキルの状況に応じた使い分けを，様々な社会的状況の経験を通じて獲得している可能性を示唆しているのかもしれない。状況に応じたスキルの使い分けの可否に関する議論やその獲得プロセスの詳細に関しては，発達の視点や縦断研究を用いて，今後明らかにすべき課題であろう。

一方聴く行動スキル尺度においては，探索的因子分析の結果，高校生版（藤原・濱口，2013）と同一の因子構造を有し，いずれの項目も，高校生版と同一の因子に対して高い負荷量を示した。これにより，高校生と大学生に対して，同一の項目群で聴くスキルの行動的側面を測定可能であることが明らかとなった。改訂前後を比較すると，改訂前の“相手への応答”や“定位”下位尺度は，今回の改訂において見出された“相手への言語的応答”や“アイコンタクト”の各下位尺度に対応している。また“話を遮らない”と“手をとめて聴く”は“遮らずに聴く”に，“前傾”と“寄りかからない”は“前傾姿勢”

に，それぞれ集約された。さらに改訂前の尺度には存在しなかった“うなずき・あいづち”が，下位尺度として見出された。これら因子構造の変化については，行動スキル尺度の改訂における“寄りかからない”に対応する項目群や件法の変更（藤原・濱口，2013）が関連していると考えられる。改訂により，当初（藤原・濱口，2011a）より想定していた8種類の構成概念に対応する項目を全て含んだ尺度が構成され，懸案であった尺度の網羅性が高まったと考えられる。

改訂版聴くスキル尺度の信頼性と妥当性の検討

改訂版聴くスキル尺度について，その信頼性を検討するため，内の一貫性としてCronbachの α を算出した。その結果，聴く認知スキル尺度ならびに行動スキル尺度の双方とも，.80前後のおおむね十分な内的一貫性を有することが明らかとなった。

次に併存的妥当性を検討するため，聴くスキルと正の関連が想定される全般的社会的スキル，共感性，社会的自己制御との相関係数を算出した。その結果，聴く認知スキル尺度においては，KiSS-18や共感性，社会的自己制御尺度と有意な正の関連が認められた。特にKiSS-18とは.47から.31と中程度の相関が認められており，本尺度を用いて測定された聴くスキルが，社会的スキルの中の一スキルとして位置づくと考えられる。他の関連についても，高校生版（藤原・濱口，2013）と同様の関連が認められており，大学生を対象とした本尺度においても，おおむね十分な妥当性が示されたと考えられる。聴く行動スキル尺度においては，KiSS-18や共感性，社会的自己制御尺度のうち“持続的対処と根気”下位尺度において，.30から.20程度の有意な正の関連が認められた。また，同尺度の“感情と欲求制御”下位尺度と聴くスキル各下位尺度との関連は.20程度にとどまり，両者の関連はやや弱かった。ただし，“遮らずに聴く”下位尺度とは.30の関連が得られており，社会的自己制御尺度との関連の大きさは，行動スキルの下位尺度によって若干異なることが示された。聴く行動スキル尺度は，主に相手に対する言語的・非言語的行動を通じて，話を聴いていることを話し手に示すことと，相手の話を遮ることなく，聴くことに徹するスキルの両側面を含んでいる。前者を達成するためには，感情や欲求を過度に抑制することなく，その都度表現していくことが求められる。このため，聴くスキルの中でも“言語的応答”や“うなずき・あいづち”と“感情や欲求の抑制”は比較的独立した要素であり，相関係数の値が低くなったと考えられる。一方，相手の話を最後まで遮

らずに聴くためには、会話途中で生じる聴き手の欲求や感情を率直に表現するというより、むしろある程度抑制することが求められる。このため、他の聴くスキル下位尺度との相関係数よりも相対的に高い値が得られたと考えられる。これら結果は高校生版（藤原・濱口, 2013）の結果と一致しているが、こうした結果は、聴くスキルを多次的にとらえることにより明らかになった知見である。この点は聴くスキルを細分化してとらえる利点の一つとなり得るとともに、今後本尺度を利用した聴くスキルに関する研究知見の蓄積、介入研究における効果指標としての利用が期待される。

改訂版聴くスキル尺度得点の性差と下位尺度間の関連

改訂版聴くスキル尺度について、各下位尺度得点の男女差を検討したところ、多くの下位尺度において、女子の得点が男子の得点に比べて有意に高かった。この性差は、既存の聴くスキル尺度（藤原・濱口, 2011a,b, 2012）の性差と一致する。青年期においては、男子よりも女子の方が他者の表明を望む気持ちが高く（新見・松尾・前田, 2004；柴橋, 2001）、友人と付き合う際に互いを理解する活動に従事する（榎本, 1999）ことが明らかとなっている。こうした青年期における感情や欲求が、聴くスキルにおける男女差を反映しているものとされている（藤原・濱口, 2011a,b, 2012）。

聴く認知スキル尺度と同行動スキル尺度の関連においては、認知スキル尺度全体と行動スキル尺度全体の間には、.63の相関係数が得られ、高校生版 ($r=.73$)（藤原・濱口, 2013）同様、やや高い値が得られた。聴くスキルという同一概念を測定する尺度間の関連として、この値は妥当なものであろう。下位尺度間の関連においては、おおむね.30以上の正の相関係数が認められているが、“前傾姿勢”と認知スキル各下位尺度の間の関連は、.25から.11と、他の行動スキル下位尺度と比べるとやや低かった。高校生版においても、前傾姿勢は他の行動スキルと比べ、認知スキルとの関連が小さいことが明らかになっている（藤原・濱口, 2013）。その理由として、身体を前方へ傾けることが相手に与える印象に関して、先行結果が一貫しないことや、話を聴く際の姿勢が話題や対人距離などの文脈に依存する可能性が示唆されている（藤原・濱口, 2013）。高校生版同様、この点は課題として残されており、今後の検討が必要であろう。

引用文献

- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房, pp.3-22.
- 相川 充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14**, 95-105.
- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術 サイエンス社
- Brownell, J. (1985). A model for listening instruction: Management applications. *The Bulletin of Association for Business Communication*, **48**, 39-44.
- Brownell, J. (2009). *Listening: Attitudes, principles, and skills*. 4th ed. Boston: Allyn & Bacon.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 藤原健志・濱口佳和 (2011a). 大学生版聴くスキル尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, **42**, 87-97.
- 藤原健志・濱口佳和 (2011b). 高校生の聴くスキル尺度作成ならびに親和動機・学校生活満足感との関連の検討—「聴く」スキルと「話す」スキルの対人関係における役割とは?— カウンセリング研究, **44**, 299-312.
- 藤原健志・濱口佳和 (2012). 中学生の社会的スキルと親和動機・学校生活満足感の関連—聴くスキルと主張スキルに注目して— 筑波大学心理学研究, **43**, 49-62.
- 藤原健志・濱口佳和 (2013). 高校生用聴くスキル尺度改訂版の作成 心理学研究, **84**, 47-56.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動制御・行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- Hargie, O. (1997). Communication as skilled performance. In O. Hargie (Ed.), *A handbook of communication skills*. 2nd ed. London: Routledge.
- 堀 匡・吉武清實・池田忠義・佐藤静香 (2011). 大学新入生を対象とした傾聴スキルに関する心理教育の効果 東北大学高等教育開発推進センター紀要, **6**, 71-78.
- 金山元春・中台佐喜子・前田健一 (2004). 中学生の積極的な聴き方スキルと学校適応 広島大学

- 心理学研究, 4, 97-102.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 厚生労働省 (2004). 若年者の就職能力に関する実態調査 厚生労働省 2006年1月29日 <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/dl/h0129-3a.pdf>> (2013年8月23日)
- 厚生労働省 (2007). ニートの状態にある若年者の実態および支援策に関する調査研究報告書 厚生労働省 2007年6月28日 <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>> (2013年8月23日)
- Kubota, S., Mishima, N., & Nagata, S. (2004). A study of the effects of active listening on listening attitudes of middle managers. *Journal of Occupational Health*, 46, 60-67.
- 久木山健一 (2006). 聴くスキル尺度の作成および対人関係との関連の検討 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 29.
- 栗林克匡・中野 星 (2007). 大学生における社会的スキル・トレーニングの成果と評価 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 44, 15-26.
- Mishima, N., Kubota, S., & Nagata, S. (2000). The development of a questionnaire to assess the attitude of active listening. *Journal of Occupational Health*, 42, 111-118.
- 文部科学省 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申) 文部科学省 2008年12月24日 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf> (2013年8月23日)
- 日本経済団体連合会 (2010). 新卒 (2010年3月卒業者) に関するアンケート調査結果 日本経済団体連合会 2010年4月14日 <<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/030kekka.pdf>> (2011年3月2日)
- 新見直子・松尾紗織・前田健一 (2004). 大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 広島大学心理学研究, 4, 139-149.
- Rhodes, S. C., Watson, K. W., & Baker, L. L. (1990). Listening assessment: Trends and influencing factors in 1980s. *International Journal of Listening*, 4, 62-82.
- Sargent, S. L., Fitch-Hauser, M., & Weaver, J. B. (1997). A listening styles profile of the Type-A personality. *International Journal of Listening*, 11, 1-14.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 太幡直也 (2012). 大学生のチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングの有効性 常磐大学人間科学部紀要人間科学, 29, 59-69.
- 田邊美由紀・小川一美 (2008). 聴く態度尺度作成の試み—セルフ・モニタリング, 社会的スキル, 精神的健康との関連から— コミュニケーションと人間, 17, 31-42.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元の視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- Van Hasselt, V., Hersen, M., Whitehill, M., & Bellack, A. (1979). Social skill assessment and training for children: An evaluative review. *Behavior Research and Therapy*, 17, 413-437.
- Watson, K. W., Baker, L. L., & Weaver, J. B. (1995). The listening styles profile (LSP-16): Development and validation of an instrument to assess four listening styles. *International Journal of Listening*, 9, 1-13.
- Weaver, S.S., & Weaver, J. B. (2008). Talk to the hand: Listening style preferences and aggressiveness. *Individual Differences Research*, 6, 260-268.

(受稿10月25日: 受理11月25日)